

特別支援教育の視点に立った全員参加の学級経営

香南市立野市小学校 教諭 濱田 久司

高知大学大学院総合人間自然科学研究科教職実践高度化専攻 指導教員 是永かな子

【研究の概要】

本研究の目的は、通常の学級において特別な支援を必要とする児童と特別な支援を必要としない児童が共に学び、かかわり合うことのできる全員参加の学級経営の検討である。特別支援教育の視点に立った授業改善と、それを支える学級経営に焦点をあて授業実践を行った。授業実践では授業ユニバーサルデザイン（以下授業UD）の全員を対象とした1stステージ指導と抽出児童を対象とした2ndステージ指導を行った。その際には、高知県の授業UDの5つの柱である「環境の工夫」、「情報伝達の工夫」、「活動内容の工夫」、「教材・教具の工夫」、「評価の工夫」を念頭におき授業改善の手立てとした。結果、特別支援教育の視点に立った授業UDの手法を用いることで、授業参加率は向上し、授業アンケート結果でも肯定的な回答が向上したことから、授業UDの5つの工夫を取り入れた授業改善は、授業参加率を高めたり、自分の考えを深めたりする手段となることが示された。

【キーワード】 通常の学級、授業のユニバーサルデザイン、特別支援教育

1. 目的

近年、特別な教育的支援を必要とする児童生徒が増加傾向にある。文部科学省（2025）は、「柔軟な教育課程編成の促進について～各学校が編成する一つの教育課程では対応が難しい子供の包摂～」の中で、学校における児童生徒の多様性を包摂する必要性として、小学校の通常の学級において、「学習面又は行動面で著しい困難を示す子ども」は小学校35人学級では10.4%、3.6人在籍していると示している。そのため全ての学校に、多様な個性や特性を有する子どもが在籍していることを前提にすべきであろう。さらに高知県における自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童生徒数は平成11年から令和6年までの間に162人から1,766人にまで増加しており、24年間で約10.9倍にまで増加している。本研究で介入した学級でも、特別支援学級在籍や個別の教育支援計画及び個別の指導計画を作成している児童は複数名在籍している。この結果からも一斉指導では、対応が困難な児童生徒が増えていることが分かる。それらを踏まえると子どもの抱える困難さとは社会性としての「人とのつながり」と学力としての「学びとのつながり」であると捉えられよう。そこで本研究では、通常の学級において特別な支援を必要とする児童と特別な支援を必要としない児童がかかわり合い、共に学べる学級経営の構築を目的とした。学級経営は日々の授業と関連付けられるべきであると考え、特別支援教育の視点に立った授業改善とそれを支える学級経営に焦点をあてた。

2. 研究方法

202X年度の研究対象はH市内I小学校2年○組27名、4年△組28名、6年□組30名とし、授業観察と各学級担任への聞き取り、アンケート調査による児童の実態調査、授業実践を行った。

授業観察と各学級担任への聞き取りは、202X年度5月に週2時間程度ずつ3学級で学級の状態と学びにおいて困難のある児童を中心に実施した。その後、各学級担任に児童の様子聞き取りを行った。

アンケートによる実態調査は202X年度6月と12月に各学級で、子どもの強さと困難さに関するアンケート（Strengths and Difficulties Questionnaire、以下SDQ）、インクルージョンの認識に関するアンケート（Perceptions of Inclusion Questionnaire、以下PIQ）を実施し、児童個人と学級全体の実態把握を行った。アンケートの結果を各学級担任と共有し、気になる児童への支援策と各学級の特徴を生かした授業の構築について話し合った。これまでの数回の授業観察と2つのアンケート結果、各学級担任からの聞き取りから、気になる児童を抽出し、全体と個人の変容を分

析することとした。なお、SDQ では「仲間」、PIQ では「社会的インクルージョン」に関する項目の変化に着目することとした。

アンケート、授業観察等を通して上記の課題を解決するために高知県教育委員会が示す授業におけるUDの5つの視点を取り入れた授業を道徳科と算数科で構成した。具体的には「環境の工夫」、「情報伝達の工夫」、「活動内容の工夫」、「教材・教具の工夫」、「評価の工夫」を授業の中に取り入れ授業を行った。

また、花熊(2018)は、子どもの学ぶ力を育て、一人ひとりの学びの質を上げていくためには、授業の「外形」だけでなく、授業の「質」(中身)を検討しなければならないと述べる。教科教育法の視点から、教科の特性を理解して指導を行う必要を指摘しており、202X年度は授業UDを一層深めていくために、特別支援教育の視点と教科教育法の視点のコラボレーションが必要だと考え、授業実践を行った。

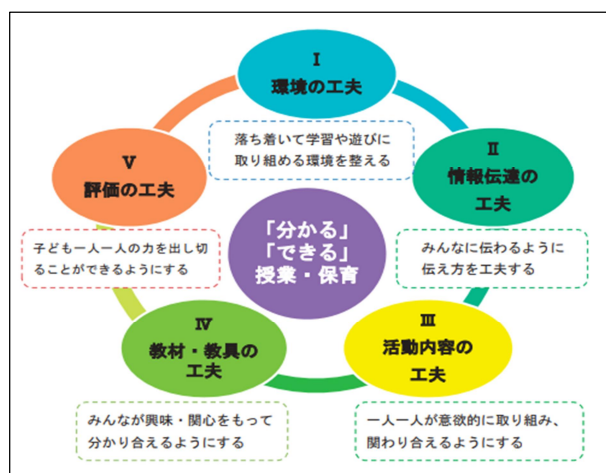


図1 「分かる」「できる」授業をつくるうえで重要な5つのポイント
出典：高知県教育委員会

3. 授業実践

3.1 授業実践【道徳】

教科教育法の視点から道徳科における理解を図2の道徳価値レベルを参考にし、道徳的価値に対する考え方や感じ方、生き方に関する理解に到達することが望ましいと考えた。それに迫るための中心発問を考え、自己を振り返り理解を図ることとした。

特別支援教育の視点から、授業指導案に「全体への働きかけ」と「個別に着目した支援」(抽出児童)を記入した。そうすることで、全員が参加できる授業展開を意識した。具体的な手立てとしては、①授業の流れを提示する。②発問をスモールステップ化して、内容を深める。③二項対立型の発問を行うことで意見をもったり、立場を決めたりしやすくする。④登場人物の心情を問うことは避け、自分のことで答えるようにする。⑤ネームプレートとビジュアルスケールを活用し、自分の立場と友達の立場を明確にして、意見を整理しやすくする。これらを授業の中に取り入れた。また指導者の目標として、特別支援教育の視点から授業の中で意識して行うことも指導案に明記し、本時の展開を具体化するようにした。要点は3つである。1つ目は学級経営的なめあてであり、「どの意見にも価値があることを見出し、相手の意見を聞いて自分の意見を変えたり、互いの立場を受け入れたりすることができる雰囲気を作る」こと、2つ目は学び方のめあてとして、「どちらの立場を選んでも間違いではないこと、その立場にも自分なりの基準があり、立場や意見を表明しやすくする」こと、3つ目は学習規律に関するめあてとして、「価値ある行動や言葉を黒板に示したり、称賛したりする」に分けた。そのためにもワークシートも書く量を減らして、ペア対話や自由対話の時間を多くし、友達とのかかわる機会を多くした。また、ワークシートに最初の自分の立場や考えを記入し、友達との交流や全体での共有後に、再度自分の立場や考えの変化を書くようにした。なお、自分の立場や考えが変わってもよいこと、変わらないことも大切なことを授業の始めに伝えた。

また、202X-1年度の道徳の授業では、対立発問が中心発問の役割を果たす授業展開となっていた。対立発問は立場を決め、理由をもつことで参加を促す手立てになる。しかし、意見を出し合うことに比重が置かれる傾向にあった。そこで、本研究では、図3の示すように、まず、「何につ

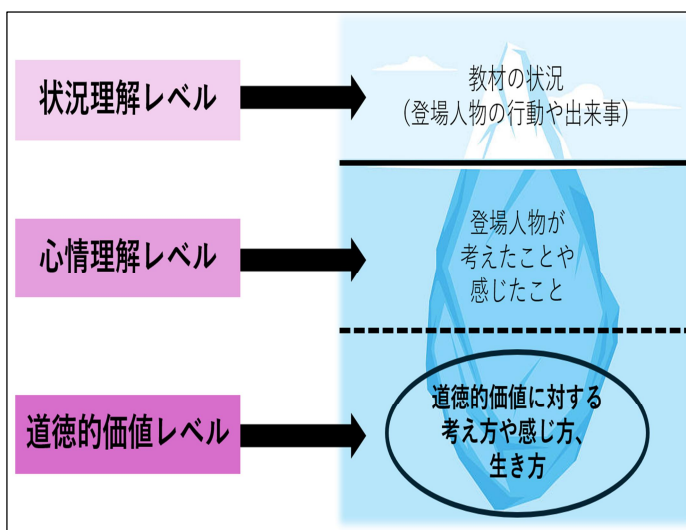


図2 「納得と発見のある道徳科 深い学びをつくる内容項目」(島恒夫)

いて学ぶのか」(内容項目・主題)をはつきりさせ見通しをもたせ、次に「授業のねらいにつながる発問」を問うようにした。この発問では二項対立等であれば、参加を促すことに効果的であると考えられる。その発問のあとに立場を選択させ自分と友達のことを比較させた。ここでは、ビジュアルスケール上にネームプレートを貼り、自由対話を行い多様な考えに触れる機会をつくり、考えを変えたり、深めたりできるようにした。ここで大切なことは、中心発問(内容項目)につながるもの、自分事として立場を表明しやすいものである。そして、中心発問で内容項目について深く考え、対話を通して自分なりの納得解を見つけていくようにした。

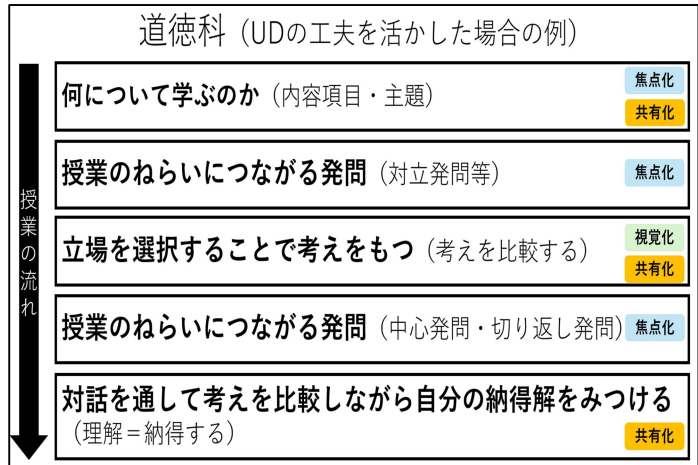


図3 道徳科における授業展開例

3.2 授業実践【算数】

算数科における授業実践では、教科の特性の理解と教材・教具の工夫が関連していることがみえてきた。また、2、4年生ともに自閉症・情緒障害特別支援学級在籍の児童は普段は特別支援学級で算数の授業を受けており、介入授業における交流及び共同学習の際に、通常の学級でどのように参加を促し、高めていくかが重要であった。まず、教科の特性と教材・教具の工夫については、筑波大学附属小学校の授業を参考にし、教材理解と特別支援教育の視点を組み合わせることにした。次に、自閉症・情緒障害特別支援学級在籍の児童については、授業の事前に活動内容を伝え、見通しをもたせる日と、何も伝えずに授業を行う日を設定して違いを比較した。

算数科の授業実践も道徳の授業と同様に、指導案の本時の展開には、右端に全体への働きかけと抽出児童を意識した「個別に着目した支援」と、それにあたるUDの5つの工夫の番号を書き入れた(図4)。

2年〇組では単元名『さんかくやしかくの形をしらべよう』を全9時間の授業実践を行った。ここでは単元導入の1時間目を中心に記述する。

本単元は図形領域であることから、認識の苦しさや作図の困難さを示す児童が多くなることを予想した。そこで、特別支援教育の視点から、図形(三角形、四角形)を必然的に作図するような活動を設定し、そのために直線を引くことの技能の向上をねらった授業展開とした。内容は動物を逃がさないように杭と杭をロープで結んでいくという活動である。杭は「点」にあたり、ロープは「直線」にあたるものである。図形の構成要素を別の物に見立て作図を行った。

具体的な手立ては以下ようになった。①直線の定義の視覚化。これは毛糸を使って、緩んだ状態とピンっと張った状態を示し、直線について実感をもたせる。②問題を短くする。問題を焦点化し、短くすることでわかりやすくノートテイクをしやすくする。今回は「どうぶつをにがすな」と

(4) 本時の展開		
I:環境の工夫 II:情報提示の工夫 III:活動内容の工夫 IV:教材・教具の工夫 V:評価の工夫		
学習活動	予想されるつまずき	<ul style="list-style-type: none"> ○全体への働きかけ ●個別に着目した支援 【】支援の工夫
1.見通しをもつ ・実際のリレーの映像をみせる。 走る順番を考えよう。		<ul style="list-style-type: none"> ○2人か3人で席多くつけさせる。【I】 ○実際のリレーの映像を見せて、問題とのイメージをつなげやすくする。【II】 ●並び方の1つを示す。【II】(A、D) ○ノートテイクは「走る順番を考えよう」と短くする。【I】 ○問題を読んでいる児童、速くノートに書いている児童を認める。【V】 ○個人思考は短くし、全体での共有で並び方を話し合う。【III】 ●考えを出し合いうちに、聞く側にならないようにランダムに指名する。【IV】(A、B、C、D) ○並び方を短冊に書いていくことで後に児童が操作しやすいようにする。【IV】 ○短冊をランダムに黒板に貼ることで、調べやすく、めあてにつなげる。【II・IV】 ●めあてを短くする。【I・II】(A、B、C、D、F) ●教師と書く速さを競う。その際口に出しながら板書する。【II】(A、B、C、D、F) ○考える時には「近くの人のやっているのを見ていよう」と促す。【III】 ○友達のことを参考にしている姿をほめる。【V】 ○樹形図をかいて考えている児童がいる場合は取り上げる。【V】 ○多様な発想、考え方を評価する。【V】 ○全体で発言させる際には、一人だけで完結させず、続きを他の児童に発言させることで理解を促す。【III】 ○まとめを考えさせることで、本時の学習を振り返らせる。【II】 ○確認問題は少なくする。【I・IV】 ●振り返りの視点を示す。【II・III】(A、B) 例:「どの(誰の)考え方がよかったか。」 例:「どうすれば分かりやすかったか。」 例:参考になった友達のことを書く。
2.問題の提示 あらたさん、いとうさん、うたさん、えいたさんの4人でリレーのチームをつくりまします。1人1回ずつ走ります。4人の走る順番は何通りありますか。	・質問の内容が理解できない。 ・ノートテイクに時間がかかる。 ・ノートに走る順番を書かすことで、何度も書くことの大変さに気付く。 ・共有の場面で聞くだけになる。	
3.めあてとゴールを示す め:落ちや重なりがないようにできる。	・板書をしない、もしくは遅い児童がいる。 ・考えがもてない。	
4.解決する ・どうすれば、落ちや重なりがないようにできるのかを考える。(ペア・グループ) ・自分とは違う考え方の友達と自由に対話する。その際にそう考えた理由を伝える。 ★先頭を決める。 ・黒板を開放し、記号化した短冊を一人ずつ操作させる。 ・足りないものについては、短冊に記入し黒板に貼る。 ・表のよう(先頭を揃えた状態)になるように短冊を整理し、樹形図につなげる。 ・樹形図をかいている児童がいれば取り上げる。出ない場合は教師が示すが、樹形図のメリットについては考えさせる。	・振り返りを書くことができない。	
5.まとめる ・児童に考えさせる。 図や表にまとめて考えると、落ちや重なりがなくなる。		
6.振り返りと確認問題を解く。 ・振り返りの視点を示す。 ・タブレット端末を使う。 ・確認問題は3問程度。		

図4 指導案例

いう問題とした。③情報伝達の工夫による説明の方法。説明は口頭指示だけにならないように、電子黒板を使ってイラストや文字を提示しながら行う。④条件を不足させる。本授業の活動内容の3つあるルールを最初は2つ目まで提示し、活動に困り感が出たときに3つ目を提示する。

4年△組では単元名『倍の見方』を全4時間の授業実践を行った。本単元は、5年生からの「割合」の学習につながる単元である。「基準量」、「比較量」といった区別する必要がある数値を分かりやすく扱うことが重要であると考えた。また、これまでは「倍」という言葉が乗法の場面で扱ってきたものが、除法でも扱うようになることから立式が難しくなる学習である。そこで、実感を伴う学習を特別支援教育の視点で構成するようにした。また、自閉症・情緒障害学級在籍の児童は、普段交流学級では算数の授業を学習していないため、介入前の授業参加率はとることができなかった。また、授業アンケートも同様である。今回の授業単元は、交流学級で学習することにした。その際に、自閉症・情緒障害学級の担任の先生からもサポートをえた。

授業における具体的な手立は以下ようになった。①算数用語をわかりやすくする。「基準量」は、「2週間前のタケノコの長さ」。「比較量」は「現在のタケノコの長さ」とする。②問題を短くする。問題を焦点化し、短くすることでわかりやすくノートテイクがしやすくする。本時の問題は「どのタケノコがよく育ったといえる？」とした。③情報伝達の工夫による説明の方法。説明は口頭指示だけにならないように、電子黒板を使ってイラストや文字を提示しながら行う。④条件を不足させる。比較量（現在のタケノコの長さ）だけを提示し、比べることができない状況をつくることで、基準量（2週間前のタケノコの長さ）等の情報を整理する必要がある。⑤必然性のある数値の設定。AのタケノコとBタケノコの基準量を揃え、Bのタケノコ、Cのタケノコともに減法すると同じく40になるように設定した。また、授業の終わりには確認問題を行い理解を図った。確認問題は3、4問程度として負担にならないようにした。また、次の時間の導入で答えの確認を行い、間違いがあった箇所を取り上げながら、本時のめあてにつなげていき、学習のつながりをもたせた。

6年□組では単元名『場合の数』を全5時間の授業実践を行った。この単元は、順序や組み合わせについて、落ちや重なりがないように、起こり得る場合を順序よく整理するための図や表の用い方を理解する能力を育てることをねらった。そのため、「順序」と「組み合わせ」の区別をさせることが重要であると考えた。

手立てとして、全時間のめあてを「落ちや重なりなくす」と統一して見通しをもたせた単元構成とした。また、①情報伝達の工夫として問題場面を電子黒板で提示し、考えさせたい箇所だけを板書する。②条件を不足させる。数字を□チームや○枚のように抜いておき、考えやすい数字から考えるスモールステップ化を図る。③並び方をランダム提示し、子どもが操作できる教具を使用する。④孤立学びにならないように、個人思考場面では対話を通した他者参照を行う。また、これまでの学年と同じように、授業の終わりには確認問題を行い理解を図った。

4. 結果・考察

4.1.1 授業アンケート結果

2年○組の道徳科と算数科における授業アンケート結果は図5、6のような結果であった（道徳科については、介入前のデータをとることができなかった）。

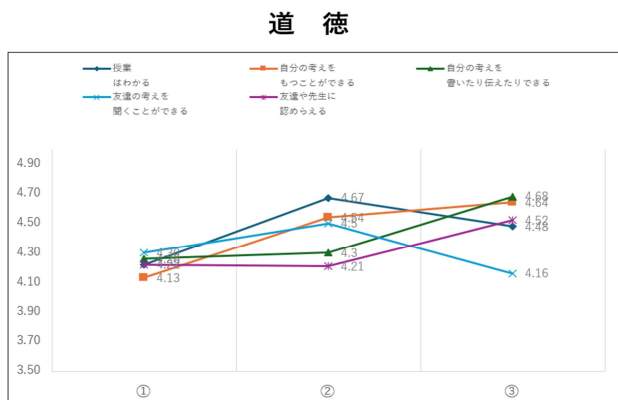


図5 2年○組授業アンケート結果（道徳）

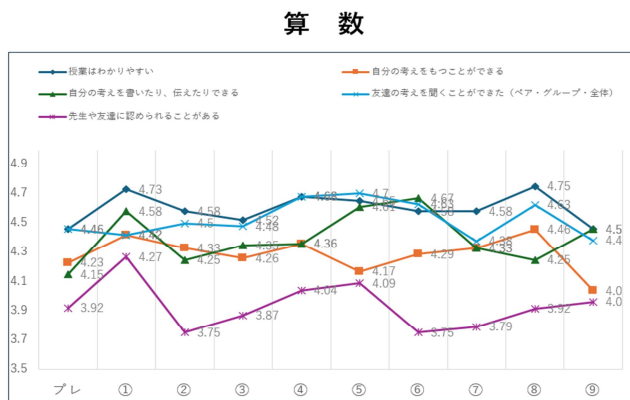


図6 2年○組授業アンケート結果（算数科）

道徳科では3回の授業を通して、「自分の考えを書いたり、伝えたりすることができた」の項目が高い結果となった。児童らは自由対話を通して、自分の考えを深めたり、友達の多様な考えに触

れたりすることができたと考える。なにより、児童らは友達と対話したり、ネームプレートを使って立場を表明したりすることを楽しんでた。これは「Ⅲ. 活動内容の工夫」、「Ⅳ. 教材・教具の工夫」にあたる。また「Ⅴ. 評価の工夫」の「先生や友達に認められることがあった」の項目も高くなった。教師が児童全員を1つの授業の中で評価することは難しいため、児童らに対話や発表を通して認め合うように、相互評価を取り入れた結果であると考えられる。

算数科の授業では、「授業はわかりやすかった」、「自分の考えをもつことができた」、「自分の考えを書いたり、伝えたりすることができた」、「友達の考えを聞くことができた (ペア・グループ・全体)」の項目については、上がったり下がったりしたもの、介入前よりも高い日が多かった。「先生や友達に認められることがあった」の項目は改善しなかった。理由の一つに道徳の授業よりも自由対話の時間が少なく、児童同士の相互評価がなかったことが考えられる。よって授業についての対話の重要性を再認識した。

4年△組の道徳科と算数科における授業アンケート結果は図7、8である。

道徳

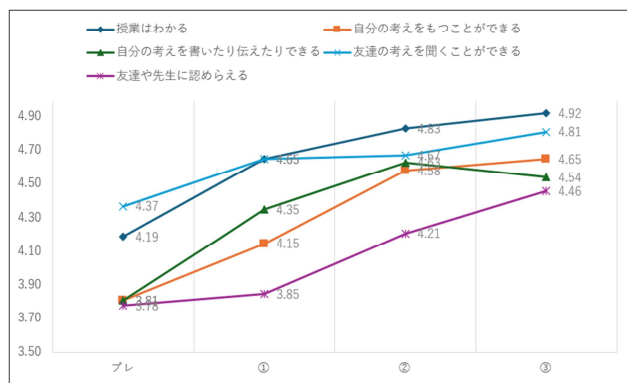


図7 4年△組授業アンケート結果 (道徳科)

算数

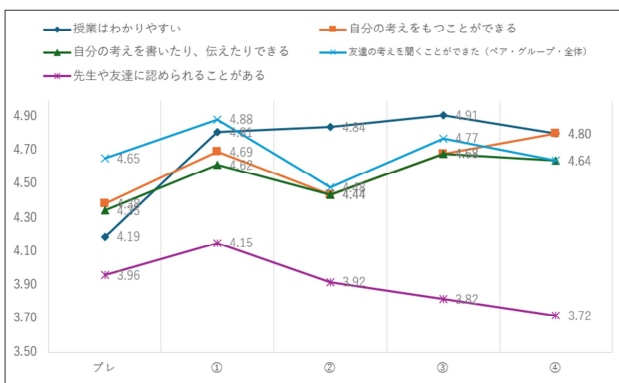


図8 4年△組授業アンケート結果 (算数科)

道徳科の授業アンケートの結果は、5つの項目で授業を重ねるごとに向上する傾向であった。とくに、3回目の授業での肯定的な回答が高くなった。その理由としては、班学習を取り入れたことで、対話が促進され友達とかかわる機会が増えたことが考えられる。

算数科の授業アンケートの結果は、2年○組の結果同様に、「授業はわかりやすかった」、「自分の考えをもつことができた」、「自分の考えを書いたり、伝えたりすることができた」、「友達の考えを聞くことができた (ペア・グループ・全体)」の項目については、介入前よりもいずれも高くなった。一方で、「先生や友達に認められることがあった」の項目は、自由対話の時間が少なく、低かった。算数科ではグループ学習等の協働的な学習も効果的であると考えられる。個人解決の時間をとることで問題を解くことができず孤立してしまうことを防ぐためにも、ペア・グループ学習は理解を促進する活動になりえると考えた。

6年□組の道徳科と算数科における授業アンケート結果は図9、10のような結果であった。

道徳

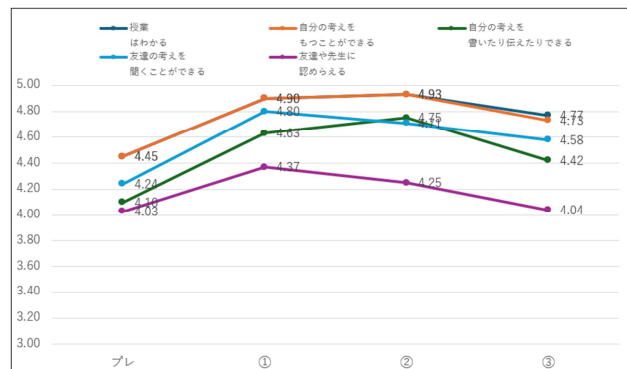


図9 6年□組授業アンケート結果 (道徳科)

算数

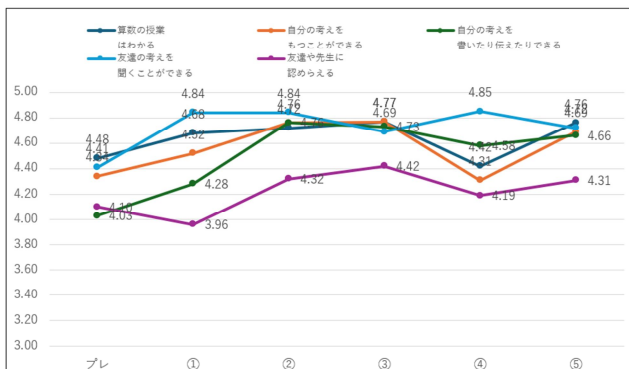


図10 6年□組授業アンケート結果 (算数科)

道徳科の授業アンケートの結果は、3回の授業のいずれの項目も介入前よりも高い結果となった。とくに、ポスト①と②の授業では、「授業は分かりやすかった」、「自分の考えをもつことができた」、「自分の考えを書いたり、伝えたりすることができた」の項目は顕著な伸びを示した。これは、学び方のルールの明確化や二項対立発問による立場選択、自由対話による考えの深まりが効果的であったと考える。これはUDの工夫の「Ⅱ. 情報伝達の工夫」、「Ⅲ. 活動内容の工夫」、「Ⅳ. 教材・教具の工夫」にあたる。一方で、自由対話がなかったポスト③の授業では、すべての項目で評価が下がったことから、児童同士の対話による協働的な学びは、参加、理解を高めていくためには欠かせない活動であるといえる。また、「先生や友達に認められることがあった」の項目は、他の項目に比べて低かった。教師からの評価を一人ひとりに届けることは困難であり、児童同士の相互評価が必要である。そのため「Ⅴ. 評価の工夫」を意識した自由対話が授業の中に設定されることが重要である。

算数科の授業アンケートの結果は、「友達や先生から認められる」の項目が他の学級よりも高い結果となった。この項目が高くなる授業の特徴としては、対話的な学びが多くあり、児童同士のかわり合いがある授業であったことである。その結果、「友達の考えを聞くことができる」の項目も高くなるが多かった。

授業アンケートの結果は、どの学級、どの教科でも介入前よりも介入後の方が高くなる授業が多かった。介入前は「Ⅴ. 評価の工夫」の項目がどの学級でも低い傾向があったが、対話的な活動や児童同士の相互評価を取り入れることによって、数値が向上した。また、毎授業後の振り返りの記述には友達の名前が多く出てきており、友達の意見を参考に自分の考えをもったり、深めたりしていることが分かった。

4.1.2 授業アンケート考察

授業の様子や授業アンケート結果からUDの5つの工夫を取り入れた授業は、授業参加率を高め、対話的で協働的な学びを促進する効果があったと考察した。全員を理解へと引き上げるためには、まず授業への参加が必須であるが、学びとのつながりが弱いと参加は難しくなる。ここで重要になるのが自分の立場の表明や意思決定をすることだと考える。

道徳科の授業実践では、自由対話や意思決定する場面では授業参加率は高くなることから、児童らは友達とかかわり合い、自分の考えを深めていくという、学校でしかできない学びを好んでいることもわかった。また、振り返りでは友達の名前を記述する児童がたくさんいたことから、友達との対話を通して、自分の考えを変えたり、自分の考えを深めたりすることで、道徳科における理解に辿り着くと考えた。

算数科の授業実践では、UDの5つの工夫の活用は効果的であった。とくに「Ⅳ. 教材・教具の工夫」は、算数に対する苦手意識のある児童には参加、意欲を高めるものであった。個人解決の場面で孤立する児童がでないように、「Ⅲ. 活動内容の工夫」の視点から、班学習の形態で学習を進めていくことで協働的な学びとなり、人とのつながりがうまれた。

このようなことから、UDの工夫を活かした授業は通常の学級において、すべての児童にとって有効な手立てとなり、子どもと子ども、子どもと学びをつなげることのできる「学校ならではの学び」であると考えられる。

4.2.1 抽出児童授業参加率結果

抽出児童は、各学級6、7名抽出したが人数を限定し算数科の授業参加率について記載する。

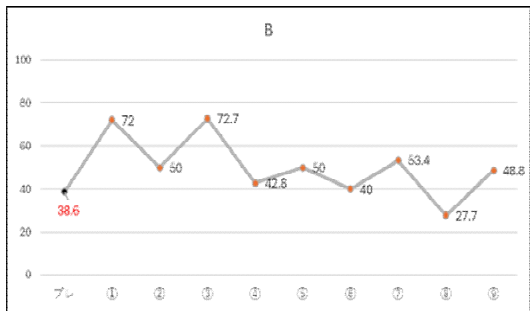


図 11 2年〇組授業参加率 (抽出児童 B)

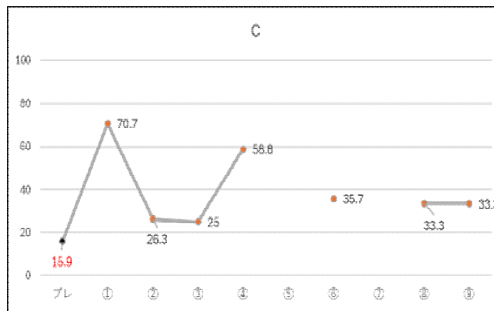


図 12 2年〇組授業参加率 (抽出児童 C)

2年〇組のB児とC児はともに自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童である。図11、12は算数における授業参加率である。普段はともに算数の授業は特別支援学級で受けることが多いが、この単元の1時間目は参加率が70%を超えた。それ以降教科書の学習内容になると、交流教室に入ることがしづむることがあった。授業前に、活動内容を伝えて、予習しておいた日は参加することができた。また、抽出児童だけに限らず、「教室の中の三角形や四角形をみつける」活動や「三角形や四角形を使つての形づくり」のような身体を動かす活動は、参加率が高くなつた。

4年△組のA児は通級指導教室に通う児童、C児は通常学級の児童である。

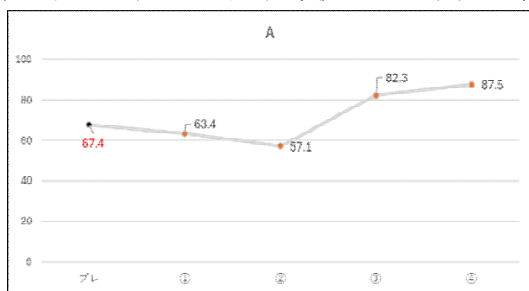


図13 4年△組授業参加率 (抽出児童A)

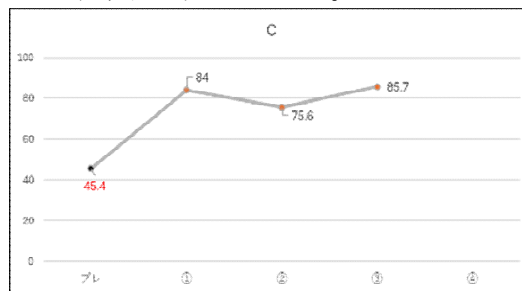


図14 4年△組授業参加率 (抽出児童C)

A児は③と④の授業では参加率が大きく向上した。この2つの授業では「Ⅲ. 活動内容の工夫」における班学習と、「Ⅳ. 教材・教具の工夫」としてホワイトボードを活用した。A児は班学習の中でホワイトボードに考えを書く役割を果たし、書いたことを伝え対話的な活動を行うことができた。C児は人とかかわることが好きである。しかし、一方的な発言などが目立つことがあった。そのため対話的な活動で一定のルールを示したり、ノートイクの量を減らしたりすることで、積極的に参加する時間が増えた。

6年□組のA児は自閉症・情緒障害特別支援学級在籍児童、C児は通常学級の児童である。

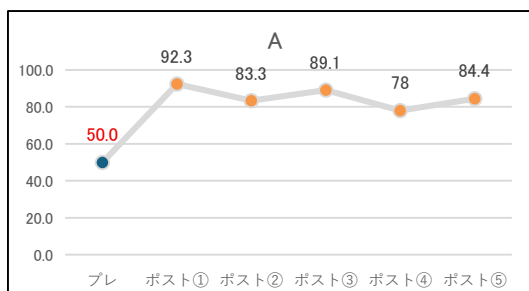


図15 6年□組授業参加率 (抽出児童A)

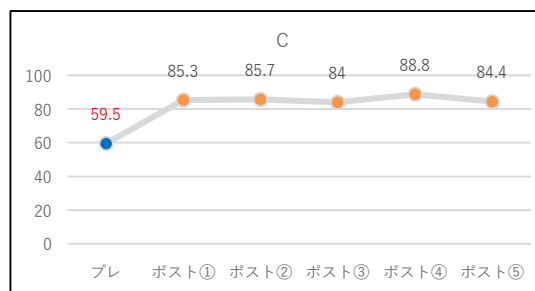


図16 6年□組授業参加率 (抽出児童C)

A児は自由対話を取り入れることで、わからないことを自分から聞き、友達を頼ることができていた。また、ノートイクの量を調整することで参加しやすかったという感想を振り返りで書いていた。C児は学級内で発言量が最も多い。時折、関係のない発言もあるが、関係のある発言だけを取り上げ、全体に広げるようにすることで、全体に説明したり、班学習で中心となつたりして学習活動を進め、高い参加率を維持していた。

4.2.2 抽出児童授業参加率考察

抽出児童の授業参加率は、どの学級、どの教科でも介入前よりも介入後の数値が高くなる児童が多かった。全体共有や説明を聞く場面では参加率が下がる傾向があったが、小刻みなペアトークや対話的な活動を入れることによって参加率が高くなることがあった。また、2年生の児童のように事前学習のように見通しをもつた状態で、授業をうけることは心理的な安心感を高めることにもなり、自分の考えをもちやすくなり、主体的で対話的な学習にもつながると考察する。また、学習時に立場や役割があれば、協働的な学びにもなることがみえてきた。6年生の授業からは、これまで全体共有の場面で全体的に見ても授業参加率が下がる傾向があったことから、全体共有の場面を小刻みに何回かに分けて行った。その結果、話を聞く時間が短時間になったことで、共有場面でも参加を維持できた児童が多くなつたと考える。

4.3 SDQ アンケート、PIQ アンケート結果



図 14 2年〇組 PIQ、SDQ アンケート結果

図 15 4年△組 PIQ、SDQ アンケート結果

図 16 6年□組 PIQ、SDQ アンケート結果

202X年5月と11月に実施したPIQアンケートの「社会的インクルージョン」の数値は、それぞれの介入学級の抽出児童に大きな向上がみられた。SDQアンケートの「仲間」の項目は、すべての介入学級（全体・抽出児童）で大きく向上した（SDQの「向社会性」以外の項目は数値が低いほど良い）。それぞれの担任の先生方の普段の授業やかかわりによって、子ども同士のつながり、学びとのつながりが強くなっている結果であるといえる。

5. 総合考察

今後、通常の学級における一斉授業の改善を図るためには、特別支援教育の視点から、授業におけるバリアを取り除くことが必須と考える。その手立てとして、授業UDの5つの工夫を授業に取り入れていくことが全員に参加を促し、理解の定着を図ることに効果的であると考察した。右の資料のように児童の振り返りにおいては、児童同士がつながり、学びとつながることで授業に参加し、学びの理解を深めていることが分かる。つまり、対話があることで深い学びへとつながっていくことができるのではないかと考える。

困難さを抱える子どもが増えている現代において、人や学びとのつながりを阻むバリアは学習環境にあることが多い。特別支援教育の視点に立つことは、このバリアを取り除くことができ、学校教育の根幹になるものであり、教師として必携であると考えている。

・最初昨日の24通りより少ないと思っていた。でも樹形図をかくと、1問目は24通りと分かったけど、2問目が18通りは分からなかった。**Aさん**が「0が百の位だとおかしいから」と言ってくれたおかげで18通りだと分かった。

・**Bくん**が言った1人分の数を固定することが今日の勉強にもつながっていたことに驚きました。〇〇くんの123、124・・・と教えていくのも樹形図と同じ考え方が出てきました。僕も同じ考えをしましたが、樹形図でやらないとめんどくさいと思いました。

・**Cくん**がわからない問題があると納得できるように私に説明してくれて授業がわかりやすくなりました。私なりに表で求めてみたけど今回の「三桁にしてください」のような問題には表は適していないと感じたので次に表を使いやすいような問題が出たら使いたいなと感じました！

・〇〇くんのA vs Bのことを知って他のチームもそれでやってみたけど、他の書き方もあって〇〇くんと**Dくん**がわかりやすく説明したり、書いたりしてくれたからよく分かった！ラクな書き方が分かったからテストの時とかにもよく使いやすそうでいいなと思いました。次はどんなことをするのか楽しみです。

資料 授業後の児童の振り返り

引用参考文献

- ・文部科学省(2025)柔軟な教育課程編成の促進について～各学校が編成する一つの教育課程では対応が難しい子どもの包摂～
- ・高知県教育委員会(2025)年度別特別支援学級児童生徒数。
- ・高知県教育委員会(2021)すべての子どもが『分かる』『できる』授業づくりガイドブック(改訂版)～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにもあると有効な支援～。
- ・PIQ 公式 Web サイト, <https://piqinfo.ch/> (2026年1月13日参照)。
- ・SDQ 子どもの強さと困難さアンケート, <https://ddclinic.jp/SDQ/aboutsdq.html> (2006年1月13日参照)。
- ・花熊暁(2018)ユニバーサルデザインの学級・授業づくりの意義と課題, 社会問題研究, 67, 1-10。
- ・島恒夫(2020)「納得と発見のある道徳科 深い学びをつくる内容項目」(日本文教出版)。
- ・山本良和(2020)「板書で見る全単元・全時間の授業のすべて」2年上(東洋館出版)。
- ・大野桂(2020)「板書で見る全単元・全時間の授業のすべて」4年上(東洋館出版)。
- ・夏坂哲志(2020)「板書で見る全単元・全時間の授業のすべて」6年下(東洋館出版)。
- ・近藤修史(2020)「ユニバーサルデザインの算数授業づくり」(明治図書)。